

総論

エネルギー問題を自分事として考える

1. 再生可能エネルギーを中心とした社会への転換に向けて
朴 勝俊

2. 「生活クラブでんき」の取り組みと地域に資するエネルギー開発
半澤 彰浩

3. 集中型の大規模発電から分散型発電への課題について
藤本 浩嗣

人々が日々の生活を営む中で、一定して変わらず、維持しなくてはならないものを表す「社会的共通資本」という用語があります。社会的共通資本は、大気・森林・海洋・河川・湖沼等といった「自然環境」、医療・教育・司法・行政等の「制度資本」、電気・ガス・上下水道・交通網・通信網等のライフラインである「社会的インフラストラクチャー」の3種類から成り立っています。

これらの社会的共通資本は、人々が生きていくために絶対に必要なものになります。例えば、私たちの生活に欠かすことができない食べ物を生み出す農業でいえば、山や森林、湖沼や河川、海洋といった全ての自然環境が整備されていなくては成り立ちません。森や山や川や海が守られてこそ、農業は成立します。また同時に農地を取り巻く、様々な環境も整備されていなくてはなりません。そのためには、山や森や川や海を守るといった仕事が続いて変わらず、行われていく必要があります。それでは、こちらも生活に欠かすことができないエネルギーについて、私たちは日々、どのように考えて

いるのでしょうか。

エネルギーは、私たちのまわりにある電化製品、自動車、機械関連等を動かすために必要であり、具体的には、石油や天然ガス、石炭、太陽光や水、風、地熱などからなる一次エネルギーと、一次エネルギーを使用しやすいように加工したガスやガソリン、電気などの二次エネルギーの2種類に分けられます。これらはなくてはならないものですが、どのような方法で作られ、どのような制度の中で形成され、どのようにして私たちに届いているかということについて、自分事として考え、目的や意図をもって使用しているということは少ないのではないのでしょうか。

総論ではこうしたエネルギーの中でも、特に日々の生活に密着している電力について考える企画として、3名の方から多様な論点を提示して述べて頂きました。本号を通じて私たちの生活と未来の環境にとって重要な電力のあり方について、考えて頂く一助になれば幸いです。

（本研究所研究員 片上 敏喜）